

夢十夜

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1908) 「朝日新聞」
参考：大庭みな子『オレゴン夢十夜』(19)80 「新潮社」
芦原すなお『新・夢十夜』(2007) 東京創元社」)
参考：監督・脚本：黒澤明 (1990)
出演：私 寺尾聡 撮影：斉藤孝雄 上田正治
老人 笠智衆 音楽：池辺晋一郎

こんな夢を見た

若いころ、夏目漱石の『夢十夜』を読んだが、あまり面白いとは思わなかった。もちろん、私の読解力が不足していたためである。

今はすこし違う、人間はなぜ夢を見るか。その夢にはどんな意味があるか。現実と夢との関係。文学の写実的表現と夢想的表現との比較、人生における夢の役割などについて考えることがある。

そこで、『夢十夜』を読み直してみた。

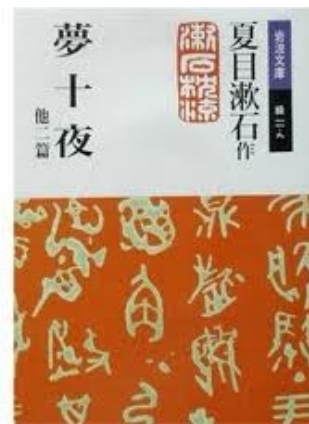
第一夜では死にかけている女から「百年待っていてくれ」と頼まれる。だまされたのではないかと思いはじめたころ、一輪の真っ白な百合が伸びてくる。いつの間にか百年が過ぎていた。

第二夜では「侍なのに悟れぬ所をみると、おまえは侍ではあるまい。人間の屑じゃ」と和尚に言われた。和尚を斬るか、切腹するか悩みながら、無とは何だ、糞坊主めと、齒噛みした。

第三夜では六つになる子供を背負って田圃道を歩いていると、「御前がおれを殺したのは今からちょうど百年前だね」と子供がいう。とたんに、背中の子供が急に石地蔵のように重くなった。

第四夜では酒飲み爺さんが手ぬぐいを蛇に変えると称し、「今になる、蛇になる、きつとなる、笛が鳴る」と唄いながら川の中に入っていく。

第五夜では、神代に近い昔、戦に敗れた。敵軍の大将が「死ぬか生きるか」と聞いたので、「死ぬ」と答えた。女に一目逢いたいと思ったが、処



夢十夜 ———— 映画文学人生論

刑される前に鶏が鳴き、逢えなかった。

こんな夢の話が第十夜まで続く。

漱石だけではない。私をふくめて人間は誰でも夢を見る。大庭みな子、芦原すなお、黒澤明——黒澤は漱石の夢からおよそ九十年後、八つの夢を見た。夢のタイトルは「日照り雨」「桃畑」「雪あらし」「トンネル」「鴉」「赤富士」「鬼哭」「水車のある村」。

「桃畑」では桃の木の霊を鎮め、「トンネル」では戦争で死んだ仲間の霊を鎮めるが、「鬼哭」の鬼の魂を慰めることはできない。鬼は罪にさいなまれながら、地獄で永劫に生き続けるからだ。

「赤富士」の夢では富士山が爆発し、六基の原発が爆発した。子供を抱えた母親が「原発は安全だつて言い続けた奴ら、縛り首にしないと気が済まないよ」とわめくと、発電所の男が「大丈夫、それはちゃんと放射能がやってくれますよ」という。そして「すみません、僕もその縛り首の仲間の一人でした」と謝罪して死ぬ。二十年後の福島原発事故を予知したような夢だ。

比較的明るい夢は「水車のある村」。葬式はめでたいもので、よく生き、よく働き、ご苦労様とって送るものだど老人（笠智衆）が言う。水車がまわり、百年たつて百合の花が咲く。わけがわからないが、それで納得させられてしまった。

漱石の夢黒澤の夢十八夜